



角川文庫

— 645 —

# 貧しき人々の群

宮本百合子



角川書店



角川文庫

貧しき人々の群



昭和二十八年七月十五日  
昭和四十四年三月十日  
昭和四十四年十一月三十日  
初版発行  
二十七版発行  
改版初版発行

定価は、帯・カバー  
に明記してあります

著作者

宮本百合子  
みやもと ゆりこ

発行者

角川源義

印刷者

村沢達弘  
東京都港区新橋四ノ三十八

発行所

●東京都千代田区富士見二ノ十三  
●一〇二 ●東京一九五二〇八  
株式会社

角川書店  
かどかわ しょうてん  
電話東京部七二（大代表）

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan

旭印刷・本間製本

貧しき人々の群

他二篇

宮本百合子

角川文庫

645

本書は、著作権継承者の了解を得て、現代表記法により、  
原文を新字・新かなづかいにしたほか、漢字の一部をひ  
らがなに改めた。

（編集部）

## 目次

貧しき人々の群

彌宜様宮田

加護

作者の言葉

解説

宮本百合子—人と作品

収録作品について

同時代人の批評

主要参考文献

年譜

宮本百合子  
津田孝一五  
二三  
五二〇七  
二〇  
二〇  
三〇  
三六  
三六  
三六  
三六



# 貧しき人々の群

序にかえて

C 先生。

先生は、あの「小さき泉」の中の、

「師よ、師よ」

何度倒れるまで

起き上がらねばなりませんか？

七度までですか？」

と言う、弟子の問いに対して答えた、師の言葉をお書きでございすか？

「否？

七を七十乗したほど倒れても

なお汝は起き上がらねばならぬ」

と言われて、起き上がり得る弟子の尊さを、このごろ私は、しみじみ感じております。

第一、まず倒れ得る者は強うございます。

倒れるところまで、グン、グンと行きぬける力を、私はどんなに立派な、またありがたいものだと思っておることでございましょう。

今度倒れたら、今度こそ、もうこれっきり死んでしまいかもしれない。

が、行かずにはおられない。行かずにすまされない心。

ほんとうにドシドシと、

ほんとうにドシドシドシと、真の「自分の足」で歩き、真の「自分の体」で倒れ、またみずから起き上がられる者の偉さは、限りなく畏るべきものではございますまいか。

まだ心の練れていない、臆病な私は、もしや自分が、万一倒れるかもしれないことを怖がって、一尺の歩幅で行くところを、八寸にも七寸にも縮めて、ウジウジと意気地なく、探り足をしいしい歩きはしまいかと言うことを、どれくらい恐れているでございましょう。

私は、もう二足踏み出しております。その踏み方は、やかて三度目を出そうとしている今の私にとっては、決して心の踊るように嬉しいものではございませず、またもとより満足なものではありません。けれども、どうしても歩き廻らずにはおられない何かが、自分の裡に生きておるのでございます。

たといよし、いかほど笑われようが、くさされようが、私は私の道を、ただ一生懸命に、命の限り進んで行くほかないのでございます。

自分の卑小なことで自分の弱いことに、いつもいつも苦しんでばかりいる私は、いったい何度倒れなければならないのか？

それは解らないことでございます。

けれども、私はどうぞして倒れ得る者になりとうございます。地響きを立てて倒れ得る者になりとうございます。そして、たといどんなに傷はついても、また何か掴んで起き上がり、あの広い、あの窮まりない大空を仰いで、心から微笑できましたとき！ その時こそどうぞ先生も、こ

いっしょに心からうなずいてくださいませ。

一九一七年三月十七日

一

村の南北に通じる往還に沿って一軒の農家がある。人間の住居すまいと言うよりも、むしろ何かの巢と言った方が、よほど適当しているほど穢きたい家の中は、窓が少ないので非常に暗い。

三坪ほどの土間には、家じゅうの雑具が散らかって、梁はりの上の暑そうな鳥屋とやでは、産褥さんじよくにいる牝鶏めんどりのクククククと喉を鳴らしているのが聞こえる。

壁ぎわに下がっている鶏用の丸木枝の階子はしこの、糞ふんや抜け毛の白く黄色く付いた段々には、瘦やせた雄鶏おんどりがちよいと止まって、天井の牝鶏めんどりの番をしている。

すべての物が、むさ苦しく、臭く貧しい裡に、三人の男の子が炉辺に集まって、自分らの食べ物が煮えるのを、今か今かと、待ちくたびれている。

ある者は、頭の下に敷いた一方の手を延はして、燃えかけの枝で、とろくなつた火をかき廻まわして、溜息ためいきを吐く。ある者は、さも待ち遠そうに細い足をバタバタ動かしながら、まだ湯気さえも上らない鍋なべの中と、兄弟どもの顔を、盗み視みている。

けれども誰だれ一人口をきく者はなく、皆この上ない熱心さで、粗野な瞳ひとみを輝かせながらただ、目前に煮えようとしている薯いものことばかりを、考えているのである。

たくましい想像力で、やがて自分らの食うへき物の、色、形、臭においを想うと、彼らの眠ねってい



あまり騒動が激しいので、かえって犬の方がまごついてしまつて、濡れた鼻で地面をこすりながら、うろうろとそこいらじゅうを、嗅ぎ廻つた。

横に垂れ下がった舌や、薄い皮の中から見えている肋骨が、ブルブル震えたり、喘いだりしているのである。

この不意の出来事に、子供らは皆立ち上がった。そして、一番年上の子は、火の盛んに燃え付いている木株を炉から持ち上げるや否や、犬を目がけて、力一杯投げ付けた。投げられた木株は、ヘラヘラ焰をはきながら、犬の後足のすぐのところに、大きな音と火花を散らして転げたので、低い驚きの叫びを上げながら、犬は体を長く延ばして、一飛びに戸外へ逃げ去ってしまった。

木株の火は消えて、フーフーと、激しい煙か立ち始めた。

この小さい騒ぎを挟んで、彼らの待ち遠い時は、きわめてのろろと這つていった。

けれども、ようやく鍋の中から、グツグツと言う嬉しい音がし始めると、皆の顔は急に明るくなり、微笑した眼が幾度も幾度も蓋を上げては、覗き込んだ。

これからしはらくすると、一番の兄は、まだ朝の食べ物があっち、こっちに、こびり付いている椀を持って来て、炉の辺に並べた。これから、このホコホコと心を有頂天にさせるような香りのする薯が分けられようと、言うのである。

一つ二つ三つ四つ。一つ二つ三つ四つ。

彼は順繰りに分けていたが、不意に、前後を忘却させたほど強い衝動的な誘惑に駆られて、皆の顔をチラッと見てから、弟たちのへ一つ入れる間に、非常な速さで自分の椀に一つだけ余計投

げ込んだ。

そして、何気なく次の一順を廻り始めようとした時、

「兄にいい、俺らにもよ」

と、その時貰う番の弟が、強情な声で叫んだ。後の者も、真似をして腕をつきつけながら、兄に迫って行った。

兄は、自分の失敗の腹立たしさに、口惜しそうな顔をしながら、突き出された腕の中に、小さい一切をまた投げ込んでやった。

けれども、初めに見つけたすぐ下の子は、兄と自分のとを、しげしげ見くらべていた後、「俺ら厭だあ！ お前の方が太ってらあ」

と言うなり、やにわに箸をのぼして、兄の腕からその太った丸いのを、突き刺そうとした。

物も言わず、その子供の顔は、兄の平手で、三つ四つ続けざまに殴られた。彼は火の付くように泣き出した。そして、齒をむき出し、拳骨をかためて「暮う一つ余計に食うべえと思つた奴」にかかつて行った。

それからしばらくの間は、三人が三巴になって、泣いたり喚いたりしながら、打ったり蹴ったりの大喧嘩が続いた。しまいには、何のために、どうしようとして、こんなに大騒ぎをしているのか忘れてしまったほど、猛り立って掴み合つたけれども、だんだん疲れて来るとともに、殴り合いもいやになって来た。気拔けのしたようなふうをしながら、各自が勝手な所に立って、互いに極まりの悪いような、けれどもまだ負けたんじゃないやねえぞと威張り合いながら、いつの間にかこ

ぼれて、潰れたり灰にころがり込んでいたりしている大切な薯を見詰めていた。

皆、早く食べたい、拾いたいと思っではいるのだけれど、思い切って手を出しかねていると、喧嘩を始めたなかの子が、押しつけたような小声で、

「俺ら食うべ」

とこぼれたものを、拾い始めた。

これを機に、他の者も大急ぎで拾った。

そして、また更めて数をしらべ合うと、今はもうすっかり気が和らいで掛け換えのない一碗の宝物をできるだけゆるゆると、しゃぶり始めたのである。

これは、町に地主を持って、その持ち畑に働いている、甚助じんすけと言う小作男の家の出来事である。

二

ちょうどその時、私は甚助の小屋裏の畑地に出ていた。ブラブラ歩いてここまで来ると、思いがけず子供らの様子が目に付いたので、傍の木蔭から非常な興味を持って、眺めていた。そして薯のことから、喧嘩からすっかりを見てしまったのである。初めの間は、私はただ厭いやなものだ、あさましいものだと思っただけだけれど、だんだん恐ろしいようになり、次いで、たまらなく可哀そうになって来た。彼らに対して一切れの薯は、どれほど勢力を持っているものか！もし私にできることなら、うんと厭になるほど御馳走ごちそうを食べさせてやりたいと言うような心持ちも起こったけれども、とうとう、私はどうしてもあの子供らと近づきになって見ようと言う激しい好奇

心に、すっかり打ち負かされてしまった。

私は、さっさと独りで入って行こうとしたが、何だかばつが悪い。

向こうがいくら子供たちでも、何だか極まりが悪い。で、私は誰か来て私を連れてってくれればと思ひながらぼんやりと立っていた。裏口からは、子供らが口の中で薯をころがしたり、互いの腕の中を覗き合ったりしているのがすっかり見える。

ちょうどいい塩梅に、その時甚助の身内の者で、家が傍だもんで、日に一度ずつ子供ばかりで留守居をしているところを見廻っている婆が、いつものように手拭地のチャンチャン一枚で向こうから来た。

私はさっそく婆にたのんだ。そして、初めて甚助の家へ入って見たのである。そこいらじゅうは思ったより穢く臭かった。

私が戸口の所に立って、内の様子を眺めていると、婆は、げげんな顔をして、ジロジロ私の方ばかり見ている子供たちに、元気のいい声でいろいろ世話を焼いてやっている。

「ちゃんは今日も野良さ行ったんけ？ おとなしく留守をしてろよ。また鉄砲玉（駄菓子）買ってくれっかな」

そして黙り返ったまま、婆が何と言おうが返事をしようともしない子供たちに、何か言わせようとしきりに骨を折っても、頑固な彼らはただ、臆面のない凝視をつづけているばかりで一言も口をあこうともしない。皆が、憎いような眼をして私ばかり見ているので、だんだん私は来ちゃあ悪かったのかしらんと言うような心持ちになって来た。

婆は、しきりに、気の毒がってかれこれ執りなしにかかって、子供らはいっこうそんなことには頓着なく婆がいわゆる、「しょうし（恥ずかし）がっていますんだ」と言う沈黙を続けている。私には、なぜ子供らがこんなに黙り返っているのかいっこう訳が分からなかった。それで、幾分蹴落とされるような心持ちになりながらも、しいて微笑をしながら、

「父さんや母さんは？ 淋しいだろう？」

と、一番大きい子に言うと、いつの間にか私の後ろに廻っていたなかの子が耳の裂けそうな声で、  
「ワーー！」  
とはやし立てた。

私は非常に驚いたと同時に、胸がムカムカするほど不愉快を感じた。けれども、もう一度私は繰り返して見た。

「淋しいだろうね、だあれもないで」

腹は立ったけれども、私にはまだ彼らを憫むくらいの余裕はあった。

年じゅう貧しい暮らしをして、はじめに育っている子に、優しい言葉の一つもかけてやりたかったのだ。が、それにもかかわらず、

「おめえの世話にはなんねえぞーッ」

と言う、思いがけない怒罵の聲が、私の魂を動盪させる鋭さで投げ付けられたのである。

私は目の奥がククラするように感じた。

一瞬間に、今まであったすべての事が皆嘘だったような気もする。

私は、何をどうすることもできずにただ立っていた。けれども、心が少し静まると、ジイッとしておられないほどに不可解な憤怒や羞恥が激しく湧き立って、非常に不調和な感情の騒乱は、肉体的の痛みのように、苦しい心持ちにさせるのであった。

私は寛容でなければならぬ。彼らから一歩立ち勝った者の持つ落ち着きを保ち続けようとする虚栄心が臆病になりきった心を鞭撻した。

けれども空虚になったような頭には何を判断する力もなくなり、歯がガチガチと鳴っている。この意外なありさまに、婆はすっかりとちてしまった。そして子供の手をグングン引っぱって下に坐らせながら私には、詫びるような眼差しで、

「行きますっべなあ、おめえ様。礼儀もなんも知らねえで、はあとうも」と立ち上かった。私も、もう帰るだけだと思った。

婆の先に立って子供らに背を向けた時、私は自分の上に注がれている憎しみに満ちた眼を思い、野獣のような彼らの前に、どれほど私は臆病に弱く醜く立ち去ろうとしているのかと思うと、このまま消え失せてしまいたいほどの恥ずかしさに、火のような涙が臉一杯に差しぐんで来たのである。

私はしおしおと杉並木の路を歩いていた。誰に顔を見られるのも、口を利かれるのも堪らない心持ちでのろのろと足を運んでいると、いきなり後ろから唸りを立てて飛んで来た小石が、私の足元で弾んで、コロコロと傍の草中へ転がり込んでしまった。

シユウと言う音が鼓膜を打つや否や、私は反動的に身をねじ向けて見ると、まだすぐ近くの甚